

平成二十年度 入学試験問題

国語

第三回

【注意事項】

- 一、試験時間は五〇分です。(八時五〇分～九時四〇分)
- 一、問題は一ページから六ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

著作権の関係でこの部分はインターネットには掲載していません。
過去問題集などをご覧下さい。

30

25

20

15

10

5

60

55

50

45

40

35

問三 — 線(3)「このこと」は何を指しますか。本文の表現を用いて二十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問四

— 線(4)「自然というのは、人間を取り巻くそういう環境のことを言うのだと思うだろう。」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は目に見えるものだけが存在すると考え、目に見えない、自分に最も身近な自然があることに気づかないから。

イ 人間は常に大自然の脅威きょうゐにさらされてくらしているので、生活に影響えいひょうを与える自然現象には特に敏感びんかんであるから。

ウ 人間は自然と共生していくことを考えなければならず、「自然保護」が世界共通の運動になっているから。

エ 人間は、海や山や森林、およびそこに生息している動物、鳥、魚、植物だけを自然だと思っているから。

問五

(5) に入る言葉としてふさわしいものを、文中から漢字三字で抜き出しなさい。

問六

— 線(6)「そう言われても、現代人は、こういう感じをなかなか思いません。」とありますが、その理由を本文の表現を用いて三十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問七

— 線(ア)「オ」のカタカナを漢字に直しなさい。

問一

— 線(1)「地球上の厄介やっかいもの人間」とありますが、なぜ人間がそのように言われているのですか。本文の表現を用いて四十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問二

— 線(2)「対立するもの」と同じ意味で用いられている言葉を、これより後の本文から四字で抜き出しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目に見えない自然の存在とは、人間の意志によって活発に動く心臓のことであり、これらの規則正しい動きがあつて初めて人間は人間らしく存在することができるのである。

イ 「自然保護」という考え方は、じつは「自然破壊」の裏返しにすぎないものであり、このまま保護を続けていくと、人間の生活そのものが破壊されてしまうことになる。

ウ 生物としての人間の体は人間が自分自身でつくつたものではなく、自然がつくつたものであり、自然環境が失われても体の自然はこの地球上に最後まで残されていくのである。

エ 人間の存在は、人間がどう思っているかにかかわらず、他の動植物と同様に自然であり、人間の意志も、自分自身で作りだしたものでなく、自然の一部なのである。

2 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「私（鈴木えり子）」の通う小学校では六年生が鼓笛隊の演奏を行うことになっていて。リコーダーとピアノ以外の専門楽器は先生から割り当てが発表されるので、児童たちはそれをわくわくしながら待っていた。「私」とちひろはベルリラの担当になることを希望していた。そしていよいよ発表の時が来た。

今、大切なのは落ちつくこと。私は背筋をぴんとおぼした。

「まず小太鼓。棚橋、佐藤、大沢、岡田、坂本カッコゆかりカッコとじる、江田。以上六名。」

やっぱりたなちゃんは小太鼓だった。

「次、中太鼓。小林……、」

「ぎょっ！」

みっちゃんだ。みっちゃんは目をまんまるにして、金魚みたいに口をばくばくさせた。私と目があうと、自分にひとさし指をむけた。

「……………？」

「うん。」

私は自信をもって、大きくうなずいた。

「静かに。えーとそれから本木と佐野。以上三名。次、ベルリラにいきます。」

いよいよだ。

ブラバンの部員で名前を呼ばれていないのは、私とちひろと野中だけだった。

「ベルリラはえーと、木下。それから……、」

ちひろだ。ちひろがベルリラだ。

「小川、」

「えーっ！」

教室がどよめいた。だれもが指揮者になるとうたがわなかった小川さんが、ベルリラだった。小川さんは黒板を見すえて、前髪を耳にかけた。みんなのさわぎをよそに、小川さんはいたって冷静だった。

「静かにしろって。いちいち声をあげるな。」

先生が注意しても興奮はしばらくおさまらなかった。

まるですべての発表を終えたかのように。

私は姿勢をととのえた。ベルリラの最後の一枚に自分の名前が呼ばれるか、そのことだけに集中した。★ラリルベラリルベラリルベ……。

「あとは一ノ瀬。以上三名。」

……………。

頭が真っ白になった。私じゃなかった。

頭のおくから「一ノ瀬」と呼ぶ橋本先生の声が、くりかえしひびいてくる。

私じゃない。私じゃなかった。

ふと、だれかの視線に気づいた。

ちひろだった。背もたれに片腕をかけて私を見つめていた。ただじっと。

私はうつむいた。

机がゆがんだ。世界がゆがんだ。深い海の底に、背中からひきずりこまれていくような感覚。

遠くで橋本先生の声がきこえる。

大太鼓は太田。シンバルは野中。

……あ。マキの冗談が本当になった。

指揮者は鈴木。

(3) なんだエースケか。でもあいつ、楽器やっていたっけ？

「すごいじゃん！」

突然腕をつかまれた。

みっちゃんが私の腕をゆすっていた。

「やーい指揮者！ 指揮者！」

花田が鉛筆で私の肩をつついた。

「やったねえり子。がんばって。」

まえの席の岡田さんまで、身を乗りだして私の頭をなでた。

教室を見わたすと、みんなが私を見ていた。橋本先生をはじめ、野中も、たなちゃんも、小川さんも、マキも。そしてちひろも。

いつのまにか私は鼓笛隊の指揮者になっていた。

ラリルベのおまじない。

あれはいつたいたんだっただろう。

授業がおわると、私は人ごみをかきわけてちひろに近づいた。

「ちひろ！」

まえを歩いてきたちひろは大きく旋回すると、女子の輪の中にはいったちひろの短い髪の毛が、廊下のおくに遠のいた。追いかけてようとして足を一歩ふみだしたそのとき、だれかの手が私の肩先にふれた。小川さんだった。

「(4)みんないろいろ言ってたけど、私は、えり子ちゃんになるってずっと思ってたよ。がんばってね。」

そう言っつて小川さんは前髪を耳にかけた。

すがすがしい笑顔。右頬にできた、小さなえくぼ。

「うん、ありがとう。」

ベルリラになれなかった落胆がすこし、胸からみぞおちにむかって流れていった。

教室にもどると、配膳台に大きな綱がおいてあった。ケチャップとトンカツソースを混ぜたようななおい。蓋をあけなくても、ポークビーンズとわかる独特なおりが、教室中にただよっていた。

私はちひろに近づいた。ちひろは白衣に着替えている最中だった。

「いっしょになれなかったね、ベルリラ。」

片腕がうまくとおらなくて、ちひろは全身をぶるつとゆらした。

「(5)私、給食当番だから。」

★ハスキーな声をのこして、ちひろは私のわきをすりぬけた。

早食いで有名な坂本が、配膳台のまえで★トレイをかかえて足ぶみしていた。

うちの小学校は給食がおいしいともつばらの評判だけれど、ポークビーンズだけはちょっと……と私は思っている。なのになしよつちゅう登場するから不思議だ。

教壇のまえをとおりかかったとき、大久保先生が声をかけてきた。

「指揮者の鈴木さん、大役だけどがんばってね。」

「はい。」

指揮者の鈴木さん。

なんだか照れくさい。実感がわかないのに、事実だけはみんなの心にきちんと記録されていく。私自身、とまどいながらも、うけいれているような気がする。

「私が中太鼓なんて本当びっくりしたよ。ハッシー、いったいどういう基準で決めたんだろうね。」

みっちゃんがロールパンをかじりながら首をかしげた。現実が信じられないのは、私だけではないらしい。

「たなちゃん、中太鼓ってむずかしいの？」

「そんなでもないよ。」

「小太鼓とどっちがむずかしい？」

「うーん。」

「楽譜読めないんだけど、どうしよう。」

たなちゃんはマキのほうをちらりと見た。マキは眉間にしわをよせて、豆をひとつぶひとつぶ皿のはじっこにおしやっていた。

私たちのグループで専門楽器になれなかったのはただひとり、マキだけだった。念願のピアノになれたはずなのに、マキの顔に喜びはなかった。だから私もたなちゃんもちひろも鼓笛隊の話題をださなかった。でもみっちゃんは、ずっと中太鼓のことをしゃべり続けている。

心配なのはわかるけれど、場の空気を読んでほしいと私は思った。

ちひろと目があった。こういうことに、ちひろはだれよりも敏感なのだ。

私は(7)目をばせした。

ちひろは視線をはずした。

……あれ？

「ねえ、たなちゃん、中太鼓ってさあ、」

「みっちゃん、チューチューうるさいよ。そういえば読書コンクルの本、なに読んだ？」

スプーンが食器にあたる音。

おかわりにむかう男子たちの足音。

教室のあちこちであがる音が、やけに大きくこえた。

ちひろが不快に思っていたのは、みっちゃんじゃなくて私だった。

廊下で消えたのは、私をさけたのだということに、やっと気づいた。

(長江優子『タイドプール』)

★ラリルベラリルベ……これ以前の場面で「私」とちひろが話題にしていた、ペルリラの担当になるためのおまじない。

★ハスキーな声……しわがれた声。

★トレイ………食器を運ぶための盆。

問一——線(1)「私は自信をもって、大きくうなずいた。」とありますが、このときの「私」の行動の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たなちゃんが小太鼓こだいこに選ばれたことにショックを受けたみっちゃんをなぐさめるために、わざと大げさにふるまった。

イ 中太鼓に指名されたことが信じられないみっちゃんに、それが本当のことであることを確信させるために、大きな動作をした。

ウ みっちゃんには中太鼓などできるはずはないと思ったが、せめて今だけは勇気づけたいという思いやりをこめた動きをした。

エ みっちゃんが中太鼓に選ばれたくらいだから、自分もペルリラに指名されるに違ちがいがないという自信が行動に表われた。

問二——線(2)「教室がどよめいた。」とありますが、これは教室のどのような様子を表していますか。二十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

ア あれこれ見て、心が迷うこと。

問三——線(3)「なんだエースケか。でもあいつ、楽器やっていたっけ?」とありますが、この部分は会話文であるにもかかわらず、かきかっこがつけられていません。それはどうしてですか。次の空らんくらんに合うように本文から二十六字で抜き出し、説明を完成させなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

ア あれこれ見て、心が迷うこと。

イ 誰だれもが予想しなかった「私」が指揮者になったことをクラスのみんなは意外に思い、その実力に疑問を感じていた。

ウ 指揮者に指名されたことによって、周囲の友だちとの関係が少しずつ変化してきたことに「私」はとまどいを感じている。

問四——線(4)「みんないろいろ言ってたけど、」とありますが、どのようなことを言っていたのですか。二十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

ア あれこれ見て、心が迷うこと。

問五——線(5)「私、給食当番だから。」とありますが、このときのちひろの気持ちきもちを二十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

ア あれこれ見て、心が迷うこと。

問六——線(6)「場の空気ばを読んではほしい」とありますが、この場面ばで場の空気ばを読むとは何をすることを意味していますか。本文の表現を用いて四十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

ア あれこれ見て、心が迷うこと。

イ 誰だれもが予想しなかった「私」が指揮者になったことをクラスのみんなは意外に思い、その実力に疑問を感じていた。

問七——線(7)「目くばせ」とありますが、この語の意味と、これと同じように「目」がつく語の意味としてふさわしいものを(意味)ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 目くばせ

二 目くぼり

三 目ざわり

四 目ぼし

五 目うつり

(意味)
ア あれこれ見て、心が迷うこと。

イ 目で合図すること。

ウ めあて。

エ 不愉快ふゆかいなこと。

オ あちこち注意を向けること。

問八 本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 橋本先生の発表した専門楽器のわりあては、みんなの予想とは大きく違ったもので、とうてい受け入れ難がたい内容だった。

イ 誰だれもが予想しなかった「私」が指揮者になったことをクラスのみんなは意外に思い、その実力に疑問を感じていた。

ウ 指揮者に指名されたことによって、周囲の友だちとの関係が少しずつ変化してきたことに「私」はとまどいを感じている。

エ 希望通りの楽器に指名された人とそうでなかった人との間に溝みぞが生まれ、友だちのきずながこわれてゆくきざしが描えがかれている。